



新古今和歌集

拾遺

下

5  
4434  
6



門 へ 5  
境 4434  
巻 6



人々

夢やういふ

うらう梅

芭蕉翁

録仕入

昭和九年  
九月二十九日  
購求

此一帖も又家よりくる人々

あつた

あつた

あつた

羅臣

鏡裏梅

帯分紙

こころいゝ鬼のちこころあきりてさかき子餉の比終は  
 涙と永大君片玉のあきりてう鬼のそしりあるん  
 き若のあきり衣箱しと海子け板とてりみあき  
 しと世のめいあきりるるの巨神あきりてりしと  
 情むの外子河のときあきりるるもあきりてりしと  
 くれくれ捨る世よ君のあきりるるもあきりてりしと  
 男のこころ腰よあきりてはあきりてりしと  
 りらり夢よあきりて鬼やあきりてりしと昔あきりてりし  
 年の粧きとあきり捨るてりしと  
 年の粧きとあきり捨るてりしと



鏡裏梅  
 帯分紙  
 こころいゝ鬼のちこころあきりてさかき子餉の比終は  
 涙と永大君片玉のあきりてう鬼のそしりあるん  
 き若のあきり衣箱しと海子け板とてりみあき  
 しと世のめいあきりるるの巨神あきりてりしと  
 情むの外子河のときあきりるるもあきりてりしと  
 くれくれ捨る世よ君のあきりるるもあきりてりしと  
 男のこころ腰よあきりてはあきりてりしと  
 りらり夢よあきりて鬼やあきりてりしと昔あきりてりし  
 年の粧きとあきり捨るてりしと

ちのうさゆくしるまゆあまにむくし練のあしりふ操り  
てもこまねのあしりしう今ハ八雲の二つともまふり  
コ成よしうと候しすや巨津十男のちるハ所ハさるる  
後おまのちとあし呼ぶししてはしりしとまふりす  
うとまのちの年波のまなくまふりしとまふりす  
しとまのち今ハ世にいしりしカの老ハとまふりす  
さはしりしとまふりす

一 一えこの梅はうらやま  
言もらうと坊や梅の尾おし  
梅やさく福と鬼とのあし坊

ハる坊

二十ふりまるとりよものま蒸るの洞とて詩を連佛ハ  
上まいしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
詩歌まのちのちとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
劣らしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
あまのちのちとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
とまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
うまやつれくまのちとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
しとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
佛のうまのちとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
しとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
あまのちとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし  
しとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりしとまふりし



子入用の調度と搔きすくさるる杖とて志を  
助け棚の氣を驅出— 簷にさく端の氣を拂ふ  
俯して石公の傍下の礎をみる仰いそ伯獵の松乃  
おえと盗むは使あり花の折— 指はさす— 公  
つ— の木のりともささるる— 曳らるる— あり  
松とも— せり— 垣へおとす— 掃とさる— 柳子  
さらさら— の秋も— 雨は— 掃連の舟は借さは  
西院の神をぬ— さら— 及も寸洗済の鹽のか— 八洞明  
う沼奥ま匠中も動く干つ— され— 八所  
二— 節— あり— 紐— として捨てる— おら— ち— 節— 練り  
まけ— あり— いて— とも— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
弘まうと— 彼— 新— 上の自在鍵— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
を起し— 新— 子— 乃— 上の自在の鍵— 子— 臨— 之— 能— の— 多— 少— と  
く— へん— 小— 板— 念— 念— の— 掛— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
自在鍵— 世— 小— 小— 名— を— 掃— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—

あな句塚序

ゆあ— 時— 節— 念— の— 社— 中— 念— 念— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
の後— 小— 小— 小— 小— 念— の— 句— を— 石— に— 彫— 不— 朽— の— 世— 句— 塚— を—  
築— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
御— 子— 塚— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
とも— 只— 籠— 小— 蟻— の— 穴— を— 築— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—  
ち— の— 志— あり— 同— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち— ち—

そのあつらひをて悦び一言れ謝れも述るんと社中  
皆云ふと只忌々妻の祟ありと座を其座をわらはすと  
より我曹の頼よりふありとさりと云ふと合らまぬす志と  
をいん々きりいにいなりと云ふく時一も其の心なれ  
宝生院の傍よりさるる地をわら一其の石と建一城  
の塚ありとてさるる地をわらあり予にいけりすと後  
一白と清く実の少年をわらとて由都とて  
諸白も身の後をわらせんとやせぬあまの孫禮家  
と早針と云ふる話よりとて花をわらとて信をわら  
危しとてまされ目とてとてとてとてのすれ  
のあま村とてとて世にあまののほまのまは  
あまの只いれとてのまらりとてとてとてとて  
あまのす美も鬼もまらりとてとてとてとて  
風俗も心ある人の話よりとてとてとてとて  
羊をわらと白氏とてとてとてとてとてとて  
あまのまらりとてとてとてとてとてとて

我と其の塚の掃除やまのま

帚分唐記

わうこうは鐘籠とらふ者ありとてとて鬼を逐ふとて  
を容ととてとて眼を翳し一掃を擽けく長劍を  
也とは実鬼ハ恐れつへ一されともさるるまら  
用はわら手福の并ハ怪我をわらつひあまらり  
ハよりつとてとて一かとて我國のまらり

のそりかよハ印よりき我にも年月と名のりく二句  
の文を唱へ豆をうらんく舞らうせば鬼はおつと遊  
ちり福の井ハ呼に隠ひのり豆の香にちく入るり  
孫やうとちくくちくさくおと守まに節か春あうり  
老女の節かうしてあつ福の日よ新くくちる鬼ハ  
目よ跡一されともあやハ孫お酒とあみと酒豪  
乃名をとちくく酒のそをさく鬼ハ人のりあつ鬼  
となつちくよあきハ酒のああみのと只そちく  
傍いよりてなとす者もくくよ声あるこちく  
読子いあるちくくちくちくちくちくちくちく  
産のりちくくちくちくちくちくちくちく

與晋路辞

晋路ハ竹内其ノ男ハ二四等ノ其ノ子  
正月ノあつちくちくちくちくちくちくちく  
それとあつちくちくちくちくちくちくちく  
門人とし

不佞少年のしちう俳諧を好み今老境もいこの病ハ  
やうとちくちく幽居の友とすれち何ちちくちくちくちく  
ともちくちく年之ちまに迷ひく人ハゆちくちくちくちく  
敲推を同守りもあれと源才に似ると斬ちくちくちくちく  
落ちちくちく固く辞一ちりりちくちくちくちくちくちく  
ちく一人の門人ち約ちちくちくちくちくちくちくちく  
け身子年二歳火燧ち春とちくちくちくちくちくちくちく  
ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちく  
の花ちちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちく







りつめのありてはつらな盛を借れども赤目子、護尾  
の縄とてとられ、引もく、友人の体々の後、倭とく  
故よ、運る信の時と、一期とて、舞は舞するとのこと  
川、一、白富士に、並ひて、夏の古兆とて、うまい  
つと、一、赤子、む、一、浮世に、あ、踊ら、一、多程の  
蝦蟇とありて、余とて、怪、一、妖怪、い、一、い、あ、も、赤  
ずり、一、條、赤、の、御、時、は、怪、一、毒、と、合、一、法、明、は、口  
つと、一、信、と、ま、一、ね、と、ま、一、踊、り、お、一、名、祥、と、て、増、り、お  
へ、つ、と、一、山、城、の、と、む、れ、つ、りの、瓜、畑、と、故、人、の、初  
ま、つ、一、信、と、ま、一、ね、と、ま、の、つ、この、糟、の、つ、け、ま  
と、読、り、の、奇、に、あ、つ、り、と、ま、一、い、と、ま、一、や、り、ま、ま、  
の、秋、の、体、は、一、秋、の、果、は、一、秋、の、名、は、一、大、赤、也、田、中  
の、秋、も、ま、一、と、ま、一、世、に、ま、ま、一、名、と、ま、  
り、あり、と、ま、平、家、の、つ、遣、を、似、せ、る、や、一、只、に、つ、  
矛、と、骨、一、味、も、は、油、の、味、を、と、り、て、寺、に、晒、焼  
の、体、を、と、一、い、と、ま、一、か、い、と、一、果、一、た、ま、が、  
今、の、お、も、一、れ、と、ま、一、あ、ま、一、れ、一、れ、一、れ、  
あ、ま、の、ち、と、一、瓜、の、蔓、に、お、子、の、あ、つ、一、只、に、つ、あ、ま、  
何、と、ま、昇、の、あ、つ、一、山、や、一、不、用、の、字、い、つ、一、つ、  
う、と、あ、い、味、も、一、あ、つ、一、人、の、味、も、一、捨、ら、れ、一、島、の、信  
と、あ、ま、果、あ、つ、一、や、み、紅、く、と、扇、を、把、と、一、一、つ、  
と、下、あ、つ、の、姿、あ、つ、一、地、流、と、ま、一、赤、と、ま、一、只、  
ま、丹、り、一、あ、ま、一、漬、桶、の、一、信、と、一、一、棚、は、一、強、ま、り

祭嘯花文

こみ秋ハま利嘯花子の此と回の名子當りし  
を還とあるを也少壯の日明きれ友なりし  
まのの幸をばらうれあるうも文場よりし  
の人と指しおきとまも失せさるも去くのころ  
らよあうしよ只一人斗しおんぬる七十を越し  
程健よ未布ふ六十臨しその名もあらし  
只家のこ六十のころあらし  
病を裏へさあしうんぬきし  
世の中の時あらし  
やうしうし  
此の神秋の名にあるみそ

送曉夢辭

け秋をきし一お一文科の月とんとわたり  
あさもあけとやとさしる曉夢を送る其は先  
の信濃路まよあしわらふ子友梅なるあのことあり  
よ存代言る名の子  
けんくまをさし  
くねとより  
の一句をまよし  
編めり

懐詞



々々つ存一張氏、隠栖、似く、多、富、八、同、一、く、  
我、令、活、の、氣、只、以、家、く、り、之、の、ち、り、て、上、清、幸、子  
常、に、も、く、け、と、抄、の、不、自、由、あ、る、山、中、あ、る、に、今、の、山、  
風、物、に、あ、り、と、客、と、お、ま、る、中、に、実、山、の、の、山、お、と  
承、時、に、襖、子、風、塵、に、隔、と、名、の、お、し、の、杖、の、茶、と、お、  
く、一、室、子、幽、趣、と、ま、り、の、一、は、か、と、り、山、麓、に、絶、  
して、浅、木、の、丁、こ、の、年、さ、に、落、る、へ、一、け、真、子、号、を  
呼、子、更、幽、の、こ、ら、と、以、と、す、家、の、老、と、病、に、あ、と、れ  
く、神、飛、こ、と、訪、や、り、あ、ら、ん、訪、よ、く、あ、ら、は、此、名、れ  
虚、あ、ら、と、と、あ、ら、へ、

つこのり一序

む、く、業、情、い、く、人、如、く、ま、を、造、り、る、より、和  
漢、の、能、書、の、人、こ、ら、も、く、出、と、我、名、の、も、世、大、原、の、あ、ま  
の、ま、ま、と、あ、ら、い、お、よ、さ、れ、い、ま、ま、れ、は、ま、れ、業、情、ら、ん、  
あ、ら、あ、ら、あ、ら、と、つ、の、大、原、又、は、十、七、の、ら、う、は、と、造、り  
く、和、由、子、自、由、の、傷、と、あ、ら、ま、ら、ん、今、ま、こ、ら、林、出、と、  
ら、の、字、十、七、字、と、断、つ、と、又、と、造、り、一、と、あ、ら、ん、  
自、由、と、あ、ら、ん、人、の、目、と、造、り、一、つ、り、と、一、と、あ、ら、ん、  
あ、ん、と、ま、ま、と、假、名、と、造、り、大、原、の、ま、ら、と、ま、ら、ん、  
あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、一、世、の、ま、ま、と、あ、ら、ん、一、時、く、人、の、智  
ま、ま、と、あ、ら、ん、と、ま、ま、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、  
目、と、あ、ら、ん、と、ま、ま、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、  
と、ま、ま、と、あ、ら、ん、と、ま、ま、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、と、あ、ら、ん、

鍾馗と我翁の山林と鬼一口より思ふべき事  
 掛け一巻となくし家か茶舗の店も何れを味付とも  
 心へゆく奇なる無名ありある所茶付の茶屋感嘆  
 の餘り戯しむと此際子守とての事あり

全賦

茶付の老翁の暮年の一巻とありと俳諧の妙も  
 みつゝ名と全月と移りやより大邦子縁と結く  
 さふり物のやうくくくくつと濁りく濁りく濁り  
 つまらぬくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 乃魚とせりくくくくくくくくくくくくくくくく  
 暮く月と海をく一巻に編むのをりくあり又其の



世話にりし月お茶の余のありしみやよりくく  
 市中の茶の物のやうりさくはある店をりくく  
 茶味もくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 茶をけく大に飲するのさ由茶人の心のけく物とも  
 茶は又塵俗の世の中茶をくく物もあつてすくく  
 夕顔の地味をありけくを茶をくくくくくくく  
 一人の思ふくくくくくくくくくくくくくくくく  
 を自覚候意くく後の今に必くく茶をくくくく  
 とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 叶のくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 と茶をくく外ありの茶をくく茶を杯を林くく  
 粥と煮るもくく七人の用とありを大くくくく

知しし我らに奇女と名づくはさうつくは金月の名を  
定むるや年をく果しては金と名づくはいつはさうは  
渠を呼ぶくさうはしを名と名づく呼ぶ心我ら金  
うかば我らされ世の物語は昔は名をさう名を  
子我らくうの御れくはくはくはくはくはくはくは  
まより徳を名づくはくはくはくはくはくはくはくは  
さうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
まを名づくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
りの談うして金月と名づくはくはくはくはくはくは  
さうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
さうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
いふはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
さうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

与 徳意文

徳濃州内侍更直亭三止り書

机は横一徳意はくはくはくはくはくはくはくはくは  
用するもあく徳意はくはくはくはくはくはくはくは  
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
媒拂の厄介ありくはくはくはくはくはくはくはくは  
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは  
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは





の影をばたけしるなり——よもよもしく瀬のちうらあつと  
夢みしてちりて流心するもさきさきかたねと白とらよの  
袂のよれあふしてそのきちありわらふ似しれと君に  
久々の月の中まも學と描とけをわやま白と  
けよのまめやあふむ

白の香や月の鬼いきくおとむ

百話亭辭

令人のこゝ臧——抱いそをさ——のら——さも只つよ  
人のこゝもしてすきもはあつ——とさすもや中年と臧  
せりよ——もちく年くぬき——との句もすうけ非れ  
睡りのあぬのまいたく——まよよとのあつて非れと  
語りて——庚申坐の指の如く年をすて——まよも  
いらへすうたたく是岡に岡ううう——まよまらとくああ——ま  
捨てくまは擧まあふむのこま——あ——の指をさ  
翫む俳諧一時の談笑よあをををる百話亭すう  
ささるまら——のうれくもあうむうむくせらる物類  
とらあうさけ——とらあふのまらぬとぬくて奇怪  
の後さか——にららららて申さる教百に満る時——ま  
妖物の出る——とく入——百話亭の名をすうと抱いの  
百話語の舎あふも訝らんとせしむと俳諧の扱會  
ありとくそ句教百に満るはあひ勝手口の屏風のよす  
女の首より忽ちとんとと失くるとかお合の時と  
家よあふむやうて甚下は擧少は踊り廻板動き出

從棚のあつらひをくわへてきこくぬきよりの  
はつら妖物の出るよあつてふら茶れ出るなりなりと  
とくく人の清くしきりけ亭子一章の文を信じて  
例の戲言をまじに何とせよ世のうらあつて  
さる百話大内のしつら宛んぬ鏡舌の咎もあつて  
了

信佐を洗耳亭

とくくはつらあつてのふ余なりなり信佐の里に世  
あつて水鏡塚ありさつら四方は甚るる草を  
あつて其句を張せし地とてい地とてつらあつて  
とてい地とて葉より申へし葉し人と志すよ  
くハ地とて甲に文しき強士吟心なりしり一  
みきをさつらあつて生涯風航子持し惜しむ  
冬享年古稀にいつと流し卒にお基の家とて  
孝子洗耳亭のあつて遠近程録の挽詞とて  
と世に一帖を遺すこと予し小亭とて清く  
我れより不才の標標をハ標老行き花とて  
あつてあつて野のよも綴よとてあつてあつて  
求あつて固く辞しとてあつてあつてあつて  
りまつて何とていしつらあつてあつてあつて  
且吊い且ハあつてあつてあつてあつてあつて  
はつてあつてあつてあつてあつてあつて  
かあつてあつてあつてあつてあつてあつて

新雨亭日記

城北の市中より... 世々... 父祖の徳を... 筆...

はせりゆく屋を藤トしる如し一袖少るまのたきすの  
まを和柔の厚を思ふ年々くみつゝ妖の皮を従魯魂の  
正辨と彫し一筆子蓬草のゆゑに空を言ふく世の外  
は餘齡をさるなり知るの因縁くのこゝろ一々焼扇  
より建りしとらそさつる人々を空を喚つけく後る  
栖も而る自きや心今ふ叢よりきりけく後つみの  
周と妨らるる子志つゝなりさるるもさるる塵客  
のより狐松のありし因縁おも思はるるの人世にいつら  
空の狐あねをましくしる心よ長布よ山椒の温茶  
とまけく我も亦快くとしるよ

方十園記

ありし名けく方十園とす十は十里を十はありし  
所よりありし及もありしとつゝの同地なりとす  
も後ちりて空を思ひしりゆりゆりのよりゆひし  
無心つゝありし世の人々といひて空を思ふと  
け園とんせしゆはくこゝろみえれとまを擲く和嘆  
とへし一冊をか安永元年同猿月よき世まつ心  
にちりしり七十年にその半掃を思ふは

指掌堂記

年はおもしろ好むの漢ありあつた世つゝの業を  
しる心とて書坊のこゝろめりけし世に高治のたま  
ありし中よとてしるまはしるし店録



昔は松浦と名を分り西の角かや伊勢より  
近江の山々まで嶺をたつて松と甚遠くは又ちかき  
あふき松は存風とひるこそしやうり城下へこれ  
と風聲の響ききうく松は豊後豊前と舞のあり  
四射の佳歌りいつくすましく何を揚てらけ名とを  
せんされ地をく松は時多にのころ者明秋は福美  
高に宿しあふまをくに海を縁只夫月とのこころ  
遠るまゝこれ又一字と流す物各入といへる出のハ  
こよりぬまといへるあを葉の送るといへる松は葉つ  
へしをを以てけ二字は定む松はき松を惜むら也  
所謂東坡の亭と云ふ裏合の隣ありむもああり

山本旦の口号

舞津にえくくかくうく樓心着あり年ぬく  
いづれや人の向らうそやうと繪縣の老人の  
むつうまあそくハあるへくもあはれう後いふ  
よきくそく

いづれは松といへる一は千七やうあ  
つきくといふは面目も形

松歌 并引

金井氏桂五子の存す一株の松ありけ松よりく我  
松を求らるるもけ求らるるもけ松より母のいけ

ありて始て髪を束する年すまひより一少松のそく  
 とたよつらうく米を束する年すまひより一少松のそく  
 らよへく新の由も清くへく今もあうきりともそく  
 ありて柱子のきぬもいねもいあうきりともそく  
 してくきぬよりそくねも及うあうきりともそく  
 ありてあうきりともそくねも及うあうきりともそく  
 き四句のそくね名の約そあうきり自然のそく  
 りと自然のそくね名の約そあうきり自然のそく  
 ありてあうきりともそくねも及うあうきりともそく  
 ありてあうきりともそくねも及うあうきりともそく

ありてあうきりともそく  
 ありてあうきりともそく

ありてあうきりともそく  
 ありてあうきりともそく

ありてあうきりともそく

ありてあうきりともそく



補遺

布袋屋風字句集序

風雅を常と西東する女の布袋屋を訪はるるに  
 訪へい句れあふる形に句あれと記せしるるに  
 記する者三百全吟ううと一冊に満りたるに  
 年の及懐ふきをあらう丙丁を延きて池魚の年  
 け舟子よ及ひ年未のほそい端うく一竹の鳥者  
 せん女惜心こ恨心こあう深く悔程きよん  
 ぶ記するささい出くさうてくこ一帖を起す  
 するも其かたれに十にさうれうらまら及らす  
 されともあうの年らあさ甚老に徳りやまに隣  
 ありてさうりあつて中はありあう又梅子もさう  
 序と清けさうさうさうさうさうさうのまに  
 懐けは後よ生よ蕨必茶さうと程融をありさう  
 より句をさうさうさうさうさうのまを懐くまの  
 何の悔えの塞さうさうのまも今十年のまを懐く  
 後すうさうさうさうさうさうさう

巻のやうりさうさうのまのまに

昭和七年庚寅に集る古稀あ二年のまをせむ乃  
 後すうさうさうさう

